NICU留学記

2009年３月より，神奈川県立こども医療センター新生児科では全国の若手医師を対象とした「新生児医療のための短期有給研修医制度」をスタートさせました．７～９月号では，短期研修医の同僚として１年間にわたる長期研修生活を送った下風先生の留学記を，番外編として紹介します．

留学生：下風朋章
山形大学医学部附属病院小児科
→神奈川県立こども医療センター

研修期間：2009年４月１日～2010年３月31日

第３回：「見ようとしないと，見えてこない」

神奈川こどもの新生児医療は，徹底した現状把握から始まります．動脈ライン留置，エコー，採血の頻度は高いと思います．ミニマルハンドリングが世の流れと思っていた私は，当初，違和感を覚えました．ただ，いずれの所見も大きく動いていて，一般論では語ることのできない多様さに気付きました．いったん見てしまうと，見ずには不安になり，「見ようとしないと，見えてこない」「知らないものは，見えてこない，知り得ない」と実感しました．急変させない事前の対応が取られていたためか，重症度の高い病棟ですが，予期せぬ急変はありませんでした．

エコーであれミニマルハンドリングであれ，良い医療の「手段」に過ぎず，「目的」にしてはいけないとあらためて認識しています．一般論や予断に基づいて医療を行っていた自分の姿勢は変わった気がします．また，よく考え観察することで，日々のスモールサイエンスを楽しむことを学びました．神奈川では師匠，仲間共に新しい知見に興味を持つ人ばかりでした．呼吸器やエコーを皆で囲んで，コメントが飛び交っていました．一方で，レジデント仲間は，ガツガツとひたすらメインプレーヤーに徹することはなく，主治医のサポーター役（検体処理から伝票書きまで）も皆，上手でした．これは「神奈川こども」というよりも，幸運にもよい仲間に恵まれただけかもしれません．仕事は相応に大変でしたが，労働環境にストレスはありませんでした．雰囲気は明るかった！

マニュアル本があり，すでに施設としての方針が出来上がっていると思われるかもしれませんが，症例ごとに随分と悩みながらの診療でした．「こうでなくては」という固執や枠組みへの押し込めはありませんでした．神奈川での研修は自分の新生児医療の基礎として重要ですが，不動の絶対基準ではないと思います．神奈川こどもと同様に，自分もさらなる良い意味での変化を加え続けられればと思います．　（了）

●留学記録　搬送から戻ってきて，やや車酔いのところです（中央：筆者）．